

## 黙示録2章18-29節 「腐敗した教会」

### 1A 主の知識 18-19

### 2A 悔い改めない者 20-23

1B イゼベルという女 20-21

2B 神による報い 22-23

### 3A 勝利を得る者 24-29

1B 持っているものの保持 24-25

2B 諸国の支配 26-29

## 本文

黙示録2章 18 節から 29 節までです。今日は、主が使徒ヨハネに現れ、「今ある事」として七つの教会に対する使信を語られた、第四の教会になります。テアテラにある教会です。

### 1A 主の知識 18-19

18 また、テアテラにある教会の御使いに書き送れ。『燃える炎のような目を持ち、その足は光り輝くしんちゅうのような、神の子が言われる。

テアテラは、前回見ました、ペルガモの教会から南東に約 65 キロに位置する町です。この地域の中心都市ペルガモや、次に出て来るサルデス、それからエペソをつなぐ交通の要所でありました。ギリシヤ帝国から、ペルガモ王国に、そしてローマ帝国の統治下に組み込まれました。おそらく、七つの教会の中では、最も小さな町であったでしょう。なぜなら、リュウコス川沿いの肥沃な平原に町がつくられているからです。肥沃な平野ですから、軍事的には外部の攻撃から自分たちを守ることがなかなか難しい所でした。それで、戦争が起こるときごとに攻撃されて何度も町が壊されたそうです。

けれども、その交通の要所であることから、商業の町として発展します。パウロが第二次宣教旅行を始め、初めてヨーロッパに入ったピリピの町での出来事を思い出してください。パウロが安息日に祈り場で、川岸のところに行き、そこで福音を語りました。そして使徒 16 章 14 節にこう書いてあります。「テアテラ市の紫布の商人で、神を敬う、ルデヤという女が聞いていたが、主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた。」ルデヤという女が信仰を持ちましたが、彼女はテアテラから来た紫布の商人でした。軍事的には攻撃にさらされ、町が破壊されていた市民たちは、生き残るために一致団結する結束力を強めて行きました。そこで、同業組合(ギルド)が誕生しました。この町には羊毛、紫布、亜麻布、衣服、土器、銅細工、染料などの多くの組合があったそうです。その中でも紫布はテアテラ産として有名になっていました。

テアテラには、スミルナやペルガモにあるような強烈な皇帝崇拜はありません。しかし、このギルドが経済活動の中心であり、その中で享樂もあり、偶像礼拝もあり、性的不品行がありました。もし、そうした場に自分も参加しなければ、ギルドに留まることができず、それでキリスト者は強い圧迫を受けていたのです。「生きるためには仕方がない」という言葉を私たちは使いますが、主は明確に、「でも何のために生きているの？」と問い返されますね。福音のために命を失うなら、それを救い、救おうとするなら失うと主は言われました。けれども、それはこのようなことをしてもよい、という偽りの教え、偶像礼拝と不品行を取り入れる教えを、一人の女預言者によって広められていった、というのがテアテラの教会の背景であります。

ここで、イエス様はご自身を、「燃える炎のような目を持」っていると紹介されます。主が、ヨハネに現れた時の一部の姿であります。これは主が、「どんな隠れたことも見ておられて、明るみに出して、それを裁かれる」という意味合いがあります。主なる神は、燃える炎で多くの不義を行なう者たちを焼き尽くされました。預言者エリヤを捕えに来た者たちが、天からの火によって焼き尽くされたことが書かれています(2列王 1 章)。それで使徒ヨハネとヤコブが、サマリヤの町でご自身を受け入れない者たちのことで、「主よ。私たちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」と尋ねると、主は戒められ、「人の子が来たのは、人のいのちを滅ぼすためではなくそれを救うためなのです。」と言われました(ルカ 9:54-55)。ですから、私たちは今の時代、人を救うために来られたキリストを宣べ伝えることに専念すべきであります。しかし同時に、火をもって再び来られるキリストをも心に留めなければいけません。そして今、教会に暗闇の業が行なわれているのであれば、主はそれをも見ておられ、裁きを行われるのだということを知る必要があるでしょう。

そして、「その足は光り輝くしんちゅう」とあります。エゼキエル書のケルビムの上に座しておられる主の姿にも、その足が光り輝く真鍮でした。これは天の純粋さが地においては裁きとなって現れることを意味します。主はこの足をもって、地上に戻って来られ、諸国の軍隊を踏みにじられます。

そして特筆すべきは、主がご自身を、「神の子」と言われていることです。地上におられる時は、人の子とご自身を呼ばれていましたが、悪霊どもが、「いと高き方の子」と叫び、それを主は黙らせました。またペテロが、イエス様を「生ける神の御子キリスト」と告白した時に、それを他の者たちには言わないように、と戒められました。このように、地上においてのへりくだるお姿があるのですが、しかし信じる者には神の子、御子ご自身として現れてくださり、そして世界に対して再臨の時に神の子として現れるのです。詩篇 2 篇を開いてください、主がここで語られているのは、詩篇 2 篇が背景にあります。

1 なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。2 地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者と共に逆らう。3 「さあ、彼らのかせを打ち砕き、彼らの綱を、解き捨てよう。」4 天の御座に着いておられる方は笑う。主はその者どもをあざけられる。

5 ここに主は、怒りをもって彼らに告げ、燃える怒りで彼らを恐れおののかせる。6 「しかし、わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに。」7 「わたしは主の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。8 わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。9 あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。』」

ここの、「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。」というのは神の御子の宣言です。イエス様を神が甦らせることによって、この方がご自分の子であることを公にされました。そしてこの方が天において神の右の座に着いておられ、戻られる時に諸国の軍隊をことごとく打ち砕き、そして鉄の杖で強く治められるのです。

19 「わたしは、あなたの行ないとあなたの愛と信仰と奉仕と忍耐を知っており、また、あなたの近ごろの行ないが初めの行ないにまさっていることも知っている。

主は、他の教会に対するのと同じように、「知っている」から始めておられます。ここで特筆すべきは、エペソに対するイエス様の言葉、「初めの愛から離れてしまった」という言葉ととても対照的なことでもあります。むしろ愛と信仰、また奉仕に優れていて、初めの行ないよりも優っているのです。私たちが正しい心の動機を持っているかどうか？「キリストに愛によって駆り立てられている」とパウロは言いましたが、今、熱心に行なっているものが愛から来ているものなのか？そして、「信仰」に対してしっかりと守っているかどうか？これは、自分の信じていることが、健全な、正しい教え、キリストについての教えに基づいているかどうか？であります。そして、「奉仕」とありますが、これは主に愛され、主を愛するがゆえ、労して主に仕え、人々に仕える奉仕であります。自分が愛しているという言葉を使っているのにふさわしい、愛の労苦があるかどうか？さらに、「忍耐」であります。いろいろな困難や障害があっても、それでも愛の行ないを続けているか？であります。

## 2A 悔い改めない者 20-23

したがって、テアテラの教会は、小さな町であったにも関わらず、これら愛と信仰の行ない、その奉仕において優れていたということが出来ます。ところが、エペソにある教会とはその正反対の問題がありました。エペソにおいては、偽教師が入ってきてもそれに我慢することができず、追い出したのですが、テアテラはその反対に、何ら精査されることなく受け入れられていったのです。教会において、いかにバランスを取ることが難しいかを物語っています。

## 1B イゼベルという女 20-21

20 しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは、イゼベルという女をなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて誤りに導き、不品行を行なわせ、偶像の神にささげた物を食べさせている。

ここに、「なすがままにさせている」とあります。ここがテアテラにある教会の大きな問題でした。ペルガモにある教会と比べてみましょう。主はそこに対して、「少しばかり非難すべきことがある」と言われて、バラムの教えを奉じている人々がいる、とイエス様は明らかにされました。同じように不品行と偶像礼拝を行なわせる教えであります。けれども、そこには「サタンの王座」があり、それゆえに「全てに反対」という意味を持つアンテパスが殺されたのであり、それでも彼らはイエス様に対する信仰を捨てませんでした。その中にバラムの教え、ニコライ派の教えが入り込んでいたという妥協があったのです。ところがテアテラは、なんらそこに抵抗することがなかった、なすがままにさせていた、ということです。ペルガモにおいては、微妙にそのような教えが入り込んでいたのに対して、テアテラは放置されていたために、大幅に導入されていました。

私たちの信仰には、「戦う」という要素があります。ユダの手紙に、こうあります。「3-4・・・聖徒にひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生じました。というのは、ある人々が、ひそかに忍び込んで来たからです。彼らは、このようなさばきに会うと昔から前もってしるされている人々で、不敬虔な者であり、私たちの神の恵みを放縱に変えて、私たちの唯一の支配者であり主であるイエス・キリストを否定する人たちです。」神の恵みを放縱に変えた、とあります。私たちは、この世に生きていますが、この世のものではありません。主の御名のゆえに、この世の流れとは真っ向から反対するところに、信仰を保っています。しかし、その戦うこと、抵抗することの要素を、「それは偏狭である、キリスト者は、愛ではないのか」と神の恵みを放縱に変える態度をとるならば、それはここに書かれているように「私たちの唯一の支配者であり主であるイエス・キリストを否定する」こととなります。

「イゼベルという女」であります。彼女は教会において預言者を自称していました。多くの者たちが彼女の働きは優れていると思っていたことでしょう。しかし、主はそのように見ておられませんでした。その名が示すとおり、その女預言者がしていたことは、預言者エリヤを神が遣わされた理由ともなった女、イゼベルと同じ事をしていたのです。旧約時代のイゼベルについては、北イスラエルの中で、これまでになかった悪を行わせた黒幕、張本人であります。シドンの王の娘でありましたが、イスラエルの王アハブはヤロブアムが建てた金の子牛だけでは飽き足りず、シドンにまで行き、そこで彼らの拝むバアルを拝み、仕えました。そしてイゼベルがイスラエルに来てからというもの、サマリヤに、バアルの宮を建て、そこに祭壇も築きました。そして、イスラエル人たちが国民こぞって、バアル礼拝をするようにさせたのです。

しかし、その時代はシドンとの交易によって国は経済的に豊かになりました。したがって、イスラエル人は国が豊かにされているのだから、大きな問題ではないと思っていたことでしょう。恐ろしいことですね、私たちも「特に問題が起こっていないのだから、大した問題ではないだろう」と思い込んでしまいます。しかし主は、雨をやめさせ、それであのバアルの預言者との対決がありました。その後、イゼベルはエリヤを殺すという脅しを行ない、それでエリヤがシナイ山まで逃げること

になります。そこから戻り、今度は「ナボテ事件」が起こります。彼はイズレエルの冬の宮殿のそばに、ナボテのぶどう畑があるからそれを売ってくれ、と頼みましたが、ナボテは主から任されている割り当て地をそんなことで譲ることはしない、と言ったのです。それでふてくされましたが、そこにある幼児性は、まさに偶像崇拜の根を示していました。けれども恐ろしいのはイゼベルで、彼の指輪にある印鑑を使い、ナボテが神を罵ったという偽証の書を造り、偽りの証人を立てて、ナボテを石打の刑にさせたのです。偶像礼拝の根には、こうした自己の肥大化があります。わがままを通せると思わせる強い意志があります。

そして、「わたしのしもべたちを教えて誤りに導き、不品行を行なわせ、偶像の神にささげた物を食べさせている。」と主は言われています。これは実に生々しいです。主が、「わたしのしもべたち」と言われています。主のしもべであっても、不品行を行ない、偶像の神に捧げた物を食べていたのです。主に仕えているとされている者たちが、偶像礼拝に陥り、不品行を行っていたのです。おそらく、「寛容」という名の下で行われていたのでしょう。反対する、戦うということは非キリスト者的である。キリスト者は愛が特徴であり、寛容が愛であり、だから戦うことは間違っている、とします。神の恵みを放縱に変える偽りの教えです。

神の愛の中に留まる、そして神を愛して、この方に仕えるというところには、当然ながら霊的な成長が必要であり、霊的な鍛錬が伴います。しかし、アハブがそうであったように、いつの間にか自分のやりたいこと、願っていることに歯止めがなくなり、そうすることが善である、正しいことであると思ひ込みます。

教会の中で、このように世的になることを強烈に推進しようとする力が働きます。聖なること、正しいことを心から求めるべき交わりに、自分のわがままを貫こうとする、しかも貫くために、人々を巻き込む。そして、心がしっかり定まっていなかった人々を誘い出して、主からますます離れていくようにさせます。教会の中に入り込んだ偽教師を真正面から取り扱っている第二ペテロと、ユダの手紙にそのことが書かれています。神と人に仕えるのではなく、言葉巧みに自分自身にさえさせようとします。現代の社会は、まさにそうです。自己愛と、自己愛のゆえに人々を巧みに操作する病が蔓延しています。

21 わたしは悔い改める機会を与えたが、この女は不品行を悔い改めようとしな。

ここに主の忍耐が記されています。先に主が、火を天から降らすと言ったヨハネに対して、戒められたように、主はご自分の憐れみによって、人々を悔い改めに導かれようとします。「ローマ 2:4 神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。」ですから、私たちは主の憐れみの中で早まった判断をせず、主が明らかにされるまで忍耐して待つことが必要です。ところが、悔い改めません。しかも、それは、他の愛と信仰、奉

仕と忍耐の行ないという教会の雰囲気の中で、巧みに覆い隠されています。しかし、主はこれを覆いかくしたままにすることはありません。「1テモテ 5:24 ある人たちの罪は、それがさばきを受ける前から、だれの目にも明らかですが、ある人たちの罪は、あとで明らかになります。」

## 2B 神による報い 22-23

22 見よ。わたしは、この女を病の床に投げ込もう。また、この女と姦淫を行なう者たちも、この女の行ないを離れて悔い改めなければ、大きな患難の中に投げ込もう。

主は、報いを与えられます。女またそれに追従する者たちは、床を不品行で汚していました。それを、「病の床」に投げ込まれます。それは文字通りでも、そうであったのでしょうか。性病にかかることでしょうか。コリントの教会においても、近親相姦を犯している男が、「彼の肉が滅ぼされる(1コリント 5:5)」とあります。

そして次に、「大きな患難の中に投げ込もう」とあります。これは、彼らが大変困難な所に陥るといっていますが、これはその時、今の時代にそうなるということのみならず、終わりの日の大患難のことを指し示していると思われます。「教会が大患難を通るのか？」という問いに対して、キリスト者の中で議論があります。携挙があるから大患難を通らない、いや通るのだ、という意見の分かれがあります。私はこう考えます。ここにあるように、偽りの教えを受け入れている、また初めから救われていないけれども形だけは敬虔を装っている者たちは、教会にしようとも大患難を通る、ということです。信じていると言っても、実はイエス・キリストを否認しているような者たちは、形だけは教会というものが残り、そして大患難の中で裁かれるのです。

その姿は二つの箇所で見つけることができます。イエス様は、天の御国の奥義の喩えで、毒麦が畑にまかれることを語られました。「マタイ 13:24-30 イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は、こういう人にたとえることができます。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。ところが、人々の眠っている間に、彼の敵が来て麦の中に毒麦を蒔いて行った。麦が芽生え、やがて実ったとき、毒麦も現われた。それで、その家の主人のしもべたちが来て言った。『ご主人。畑には良い麦を蒔かれたのではありませんか。どうして毒麦が出たのでしょうか。』主人は言った。『敵のやったことです。』すると、しもべたちは言った。『では、私たちが行ってそれを抜き集めましょうか。』だが、主人は言った。『いやいや。毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時期になったら、私は刈る人たちに、まず、毒麦を集め、焼くために束にしなさい。麦のほうは、集めて私の倉に納めなさい、と言いましょ。』このように、毒麦が蒔かれているので、目に見える教会は偽物が混在している状態です。けれども、はっきりとするまで待ちなさい、さもないと良い麦も抜き取ってしまいます。だから、早まった判断を私たちは抑制すべきです。しかし主が裁かれます。

そして黙示録 17 章に、まさにイゼベルのような女が、すなわち大淫婦バビロンの姿が出て来るのです。ここでは、世界の国々の王たちがその女と不品行をして、女は富を蓄え、そして真実に主に従う者たちを殺し、足で踏み倒して、流血の罪を犯しています。しかし、その女は自分の乗っていた獣によって倒れていきます。教会の中に世が入ると、教会が形だけのものとなり、その形は大患難の時代にも残っているのです。背教の教会です。

23 また、わたしは、この女の子どもたちをも死病によって殺す。こうして全教会は、わたしが人の思いと心を探る者であることを知るようになる。また、わたしは、あなたがたの行ないに応じてひとりひとりに報いよう。

「女の子どもたち」というのは、女の教えを受けた継承者たちのことです。彼らは、その教えによって病の床、そして死病をもって主によって裁かれます。そして主は、これを見せしめとされます。「こうして全教会は、わたしが人の思いと心を探る者であることを知るようになる。」と言われます。テアテラにある教会だけではなく、この死病の話は全ての教会に知られることになり、それで人々が主を恐れるのです。神の聖さに対する恐れを抱くことは健全です。ペテロが、アナニヤとサツピラに対して主の裁きを宣言して、それで彼らが死にましたが、「教会全体と、このことを聞いたすべての人たちとに、非常な恐れが生じた。(使徒 5:11)」とあります。

そしてここにある、「人の思いと心を探る」であります。正確にはギリシヤ語で「人の心と腎臓を探る」となります。ユダヤ人にとって、人は心で思い、そして内蔵で感じるとされてきました。したがって、人々には覆い隠されていて、誰にも築かれないような暗闇の業も、主はことごとく探られる方なのだ、ということです。教会とは、このように人に対して誤魔化すことはできても、神に対して誤魔化すことのできないところであり、いずれ明らかにされる場所なのです。そして、「あなたがたの行ないに応じてひとりひとりに報いよう」とあります。主は公正な方です。連帯責任ではなく、それぞれ主が任せておられることに従って、各々に報いを与えられるかたです。「1コリント 3:13 各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。」

### **3A 勝利を得る者 24-29**

しかし、このような教会にあっても、それでも主はご自分に忠実な者たちを残しておられます。

#### **1B 持っているものの保持 24-25**

24 しかし、テアテラにいる人たちの中で、この教えを受け入れておらず、彼らの言うサタンの深いところをまだ知らないあなたがたに言う。わたしはあなたがたに、ほかの重荷を負わせない。

25 ただ、あなたがたの持っているものを、わたしが行くまで、しっかりと持っていなさい。

イゼベルの教えについて、「彼らの言うサタンの深いところをまだ知らない」とあります。子の教えには、テアテラで蔓延っていたギルドによる異教の儀式のことを第一義的には指しているでしょう。忌まわしい性的倒錯だけでなく、オカルトの要素も含まれていました。ペルガモの教会においては、ペルガモにサタンの王座があったのですが、ここではサタンの深いところがあります。私たちは、絶えずその深みがあるという事実を知る必要があるでしょう。霊の戦いにおいて、私たちは、これまできれいに見えていたもの、良いとされるもの、正しいとされるものに、実はサタンの深みがあることを知ります。チベット仏教のようなオカルトを含む儀式においては、その悪霊の働きを生々しく見ることができますが、日本においては非常に高度で、巧妙なサタンの住むところがあります。それを受け入れない、という決断が必要です。ここで、「まだ知らない」とあるところが大事ですね。それを知るために試す必要はありません。むしろ、純粋に福音の中に留まっていればよいのです。分裂とつまずきをもたらす者たちについて、パウロがこう勧めました。「ローマ 16:18-20 そういう人たちは、私たちの主キリストに仕えないで、自分の欲に仕えているのです。彼らは、なめらかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましているのです。あなたがたの従順はすべての人に知られているので、私はあなたがたのことを喜んでいますが、私は、あなたがたが善にはさどく、悪にはうとくあってほしい、と望んでいます。平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。…」

そして、「あなたがたの持っているものを、わたしが行くまで、しっかりと持っていなさい。」と言われます。主が戻って来る日まで私たちがしなければいけないことは何か？それは、「持っているものを、しっかりと持っている」ことです。私たちに任された福音をそのまま持っていることであります。それ以上のことをする必要はありません。「2テモテ 1:13-14 あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛をもって、私から聞いた健全なことばを手本にしなさい。そして、あなたにゆだねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって、守りなさい。」これが、私たちが携挙を待つことについての正しい姿勢です。

## 2B 諸国の支配 26-29

26 勝利を得る者、また最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与えよう。27 彼は、鉄の杖をもって土の器を打ち砕くようにして彼らを治める。わたし自身が父から支配の権威を受けているのと同じである。28 また、彼に明けの明星を与えよう。

勝利をする者たちに対する、約束です。エペソにおいては、神のパラダイスにおけるいのちの木の實でした。スミルナにおいては、第二の死からの救いでした。ペルガモに対しては、隠れたマナ、新しい名の記されている白い石でした。そしてテアテラに対しては、「諸国の民を支配する権威」があります。このことを説明する前に、「最後までわたしのわざを守る者」とありますね。先ほどの続きです、主が来られる時まで、その最後までしっかりと主のわざを守る者ということです。私たちは初めに走っている時をいつも注目します、しかし、最後まで走ったのか、完走したのか、それが大事です。



へブル書において、終わりまで確信を保っていることの大切さを教えています。「へブル 3:13-14 「きょう。」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、私たちは、キリストにあずかる者となるのです。」

そして、「諸国の民を支配する権威」であります。これは初めに読んだ詩篇第二篇の続きであります。復活によって神の御子として現れた方は、父なる神の右に着座しているところから、諸国の軍隊に対して戦い、彼らを滅ぼした後で、諸国が御子の前に現れて、この方にひれ伏すということが書いてあります。主キリストが地上に戻られて、世界を正義と平和で満たすのです。そして、キリストに結ばれている者たちが、この方であって、共に統べ治めます。今、ローマ 16 章で読んだように、悪い者たち、教会につまずきや分裂をもたらすものを避けて生きる時に、そしてそういったことが起こっていても自分はただ、善にさとく、悪に疎くある時に、主が速やかにサタンを私たちの足で踏みつぶし、それで平和を確立されます。「彼は、鉄の杖をもって土の器を打ち砕くようにして彼らを治める。」というのも、詩篇二篇から来ています。黙示録 19 章にも書いてあります。「鉄の杖」というのは、羊飼いが木の杖で羊を飼うのですが、鉄ということで強い力をもって反逆者を罰することのできる杖であります。

そして、「わたし自身が父から支配の権威を受けているのと同じである。」とありますね。父なる神が御子と一つになっているのと同じように、私たちが神とキリストと一つに交わるので、その権威が私たちにも任されるのです。船長が、舵を回すその舵がとても小さいけれども、巨大な船を制御するように、私たちは小さなイエス様への信仰を持っていることによって、世界を支配することになります。その備えを今、行なっています。小さなことに忠実であれ、ということはそういうことです。

そして、「彼に明けの明星を与えよう。」というの、キリストご自身が明けの明星と呼ばれています。ペテロがイエス様が高い山で変貌されたのを目撃して、それでこう言っています。「2ペテロ 1:19 また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。」明けの明星は、暗き夜において光の始まりであり、そしてそれが太陽となり輝く、希望の光であります。その光に、私たちがキリストと一つになっていることで輝くのだということです。ダニエルにも、主は同じ約束を示されました。「ダニエル 12:3 思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。」

2:29 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。』

全ては、御霊が語っておられることです、そして聞く耳があるかどうかであります。祈り、私たちの耳がいつも御霊に開かれているように祈りましょう。